

札幌学院大学 総合研究所紀要 投稿規程

1. 札幌学院大学総合研究所紀要 (ISSN : 2188-4897) に投稿できる論文は、情報科学、自然科学、言語学、教養教育、FD（ファカルティ・ディベロブメント）、教職研究の各分野とする。これら領域の研究や教育に関する内容を中心として受け付ける。
2. 本誌に掲載する論文の種類は、「原著」、「論文」、「研究ノート」、「総合報告」、「調査報告」、「資料」とする。原著は独創性があり実証的または理論的な論文とする。論文と研究ノートは理論的発展や定理の証明、既存の手法の改良など、これまでの理論等に対して新しい視点を入れる論文とする。総合報告は当該分野を広い視野から総合的にまとめたものとする。調査報告は各分野の方法の適用を通じて、主に実証的な観点から知見を提供する論文とする。資料は各分野で集められた公表に値する貴重な資料やデータを掲載する論文とする。
3. 論文の原稿は、日本語または英語とする。日本語（英語）の場合は、日本語（英語）による表題、要約、キーワード、英語（日本語）による表題、要約、キー

- ワードを付ける。
4. 投稿する論文は、未公刊のものに限る。
5. 論文投稿者のうち少なくとも1名は所属であること、あるいは編集委員会が認めた者であること。
6. 投稿原稿は、別に定める執筆要項にしたがって作成する。
7. 論文は図・表・要約等を含めてWord等の電子的ファイルで提出する。その際に論文の種類を申請する。
8. 原著は当該研究分野の2名以上による査読を経て、編集委員会が採否を決定する。
9. 論文と研究ノートは、その内容に応じて著者が選択をする。
10. 著者校正は初校のみとし、校正の際の原稿への加除は認めない。
11. 掲載された論文は、著者に電子ファイル(PDF形式)を贈呈する。
12. 掲載された論文の著作権は、原著は札幌学院大学に、それ以外の論文は本人に帰属する。

札幌学院大学 総合研究所紀要 執筆要項

1. 記述は簡潔かつ明瞭とすること。日本語の場合は現代かなづかい、常用漢字とする。
2. 和文要旨は500字以内、英文要旨は300語以内とする。また、5個程度以内の日本語と英語のキーワードをつける。要旨ページを含めて10ページを目安とし、これを大幅に上回らないこととする。ただし、総合報告は20ページを目安とする。
3. 句読点は「、」と「。」を用いる。
4. 本文の章・節等の記号は、章にあたるものと1., 2., …とし、第1章第1節にあたることは1.1とする。以下これに準ずる。
5. 文章中の数式の文字はすべてイタリック（斜体）とする。ただし、sin, logなどの関数記号は直立体とする。必要な数式には（1.1.2）（第1章題1節中の2番目の数式の場合）のように、数式の後に番号

- をつける。あるいは一連番号でもよい。
6. 注釈は一連番号を参照箇所の右肩に⁽¹⁾や^(1,2)のように添え書きし、参考文献のあとに「注釈」としてその内容を書く。
7. 図・表は鮮明なものを各自用意する。
8. 図・表の挿入希望箇所を原稿内に指定するか、各自レイアウトした原稿を作成する。
9. 日本語の論文では本文中の外国人名等の固有名詞は、原綴りあるいは英語綴りを原則とするが、公式の名称等として著名なものはカタカナでもよい。
10. 本文中の参考文献の引用は次の通りとする。著者が2人の場合は和文献では中黒“・”で、欧文献では“&”でつなげる。3人以上の場合には第1著者の姓を書き、和文献では“他”，欧文献には“et al.”を書き添える。

(例)

- 加納・市村 (1990) は…
 Kao & Yan (2001).
 Little *et al.* (1989) は…
 …と述べている (Little *et al.*, 1989).
 …と論考している (中村他, 2008 ; Nakamura *et al.*, 2015).

 11. 参考文献は、欧文と和文のものを混在させて、著者の姓のアルファベット順で並べる。同一著者の同年公刊の文献は年号の後ろに、a, b, c, …をつけて区別する。雑誌などの巻と号の表記は、7巻2号であれば、7(2)のようにする。欧文の書籍名はイタリックとする。雑誌名称は省略せずに書く。ウェブサイトやインターネット上の資料は、

名称 (年). タイトル, URL (年月日, 閲覧)

という形式で記述する。DOI(Digital Object Identifier)がある場合は、それを明記する。

(例)

- [1] 青木太朗 (2011a). 主成分分析とその応用, 日本技術出版, 東京.
 [2] 青木太朗 (2011b). 対応分析法の近年の動向, 計量行動科学, 15(1), 101-125.
 [3] Bustos, F. M. (1965). A strong score theory with applications, Psychometrics, 31(2), 99-111.
 [4] 加納雅裕・市村正子 (1990). 因子分析における統計的推測, 計量科学, 18(1), 13-25.

- [5] 岡本忠司 (1986). 因子分析の基礎, 日科技研出版, 東京.
 [6] Rao, C. R. (1973). *Linear Statistical Inference and its Applications* (2nd ed.), John Wiley, New York.
 [7] Rao, C. R. (Ed.) (1989). *Educational Measurement* (3rd ed.), Macmillan. (池田算男 (訳) (1992). 教育測定学, 第2版, ふたみ出版.)
 [8] 柴田祐輔 (編) (1991). 項目反応理論, 東京出版, 東京.
 [9] Wisher, A. B. (2019). The use of classification error in taxonomic problems, Annals of Statistical Sciences, 3(2), 123-134, DOI: 10.1234/j.4321-5432.
 [10] Dempster, A. P., Laird, N. M. and Rubin, D. B. (1977). Maximum likelihood from incomplete data via the EM algorithm, Journal of Royal Statistical Society Series B, 39, 1-38.
 [11] Zone, A. C. (2018). Viewing Slanted Golton Board, <http://ab-c.com/def.html>, (2018年11月22日閲覧).

12. 参考文献に掲載した文献等は、必ず本文で引用すること。
 13. 機種依存文字は使用しない。とくに丸数字①②③…, ローマ数字 I II III…が典型である。それ以外には、ミリキロギンメートル…, 明治大正昭和戦…, TEL株上申下右左…等がある。その他は編集委員会の指示に従うこと。
 14. 英文または英文要約は、最終稿までに専門家の校閲を受けることを要する。